活動日誌

2001 年（平成 13 年）

3 月　『LAGUNA（汽水域研究）』第 8 号発行
4 月　『NEWSLETTER』No.14　発行
4 月 19 日　運営委員会
　・教員の採用方針について，他
4 月 20 日　管理委員会
　・教員の採用方針について，他
4 月 26 日　拡大（教員資格審査）管理委員会
　・教員の資格審査
4 月 26 日　管理委員会
　・教員の任用について
5 月 11 日　文部科学省にて新センターに向けての来年度概算要求ヒアリング（センター長）
5 月 12 日～20 日　タイ王国ソンクラー湖調査(高安)
6 月 12 日　文部科学省にて新センターに向けての来年度概算要求ヒアリング（センター長）
6 月 25 日　国立大学博物館等協議会（北大）に出席（センター長）
7 月 10 日　第 44 回汽水域懇談会
　信州大学研究生の河合小百合さんが「AT 火山灰降下が植生に与えた影響」と題して．海洋科学技術センター固体地球統合フロンティア研究システム研究員の小栗一将氏と坂井三郎氏がそれぞれ「浜名湖における堆積過程」および「浅海成炭酸塩岩の古海洋研究」と題して話題提供．
7 月 23 日　第 45 回汽水域懇談会
　高知大学理学部教授の石川慎吾氏が「徳島県吉野川下流域におけるイセウキヤガラ個体群の動態」と題して話題提供．
7 月 24 日　運営委員会
　・客員研究員の承認について
　・受託研究の受け入れについて，他
7 月 26 日　文部科学省にて新センターに向けての来年度概算要求ヒアリング（センター長）
8 月 1 日　科研費による特別研究員（教務補佐員）として河合小百合氏着任
8 月 6 日　中海分室環境整備＋ビアパーティー
10 月 1 日　海洋科学技術センターより坂井三郎氏が客員研究員として着任
10 月 10 日　管理委員会
　・教員の割愛について
10 月 11 日　運営委員会
　・平成 13 年度予算（案）について
　・教員の割愛とその後の方針について
　・客員研究員の承認について，他
10 月 12 日　管理委員会
　・教員の採用方針について
10 月 13 日　地域開放特別事業「実感・体感　汽水域の生物と自然」開催．
　矢田の渡し船をチャーターし，大橋川から中海にかけて船上調査を体験．地元小学生ら約 10 名が参加．〈写真；1，2〉
10 月　『NEWSLETTER』No.15　発行
11 月 13 日　第 9 回世界湖沼会議・自由会議「汽水湖，潟湖，浅い内湾の環境管理と賢明な利用を考える」を共催（主催：㈳霞ヶ浦市民協会）
11 月 14 日～23 日　日本国際教育協会の帰国留学生支援プログラムの一環としてネパール王国カトマンズへ出張（高安）
12 月 15 日　総合科目教科書『汽水域の科学－中海・宍道湖を例として』（米子・たたら書房）を刊行
12 月　『NEWSLETTER』No.16　発行
12 月 17 日～31 日　文部科学省在外研究（創造開発研究）によりオーストラリア・クイーンズランド州第一次産業局水産研究所を訪問（国井）〈写真 3〉

写真 1　イェーイ！　大きなシジミがとれたぞ！（実感・体感　汽水域の生物と自然）

写真 2　船上で水質の調べ方の説明（実感・体感　汽水域の生物と自然）

2002 年（平成 14 年）

1 月　『NEWSLETTER』No.17　発行
1 月 12 日　新春恒例「汽水域･山陰地域研究発表会」他大学，国・県の関係者も含め 47 名が参加し，18 題の研究発表があった．会場はソフトビジネスパーク内に新設された島根大学地域共同研究センター．
1 月 20 日　『NEWSLETTER』No.18　発行
2 月 1 日　『NEWSLETTER』No.19　発行
2 月 5 日　運営委員会
　・新センター規則関係について，他
2 月 14 日　拡大（教員資格審査）管理委員会
･教員の資格審査について
2 月 14 日　管理委員会
　・新センター規則関係について
　・教員の任用について
2 月 14 日　運営委員会
　・新センターの規則関係について，他
2 月 22 日　センター事務室の森山和子さん（3 月 20 日付で退職）の送別会．県立美術館内レストランにて．
3 月 1 日　『NEWSLETTER』No.20　発行
3 月 1 日～17 日　文部科学省在外研究（創造開発研究）によりアメリカ合衆国サウスカロライナ大学バルーク海洋研究所などを訪問（高安）〈写真 4〉
3 月 5 日　「しまね産学官研究交流会－しまねの技術の未来を考える」（主催，島根大学ほか）にて発表とポスター展示（国井）．会場；テクノアークしまね・島根大学地域共同研究センター
3 月 14 日～16 日　松江テルサにて学内共同利用施設のパネル展示および市民講演会（国井，竹廣が参加）
3 月 18 日～23 日　日本学術振興会の二国間交流事業「中央カリマンタンにおける水界生態系の機能」の一環としてインドネシア･ジャカルタに出張(国井)
3 月 20 日　『NEWSLETTER』No.21　発行
3 月　センターの建物改修計画発表．学内共有スペースに汽水域研究センター・プロジェクト研究推進室を確保．中海分室改修工事着工．
3 月 30 日　『NEWSLETTER』No.22　発行
3 月 31 日　竹廣文明助教授，広島大学大学院文学研究科へ転任

平成 13 年度科学研究費補助金

基盤研究（A）2　中海干拓中止後の汽水環境の修復および保全に関する研究（新規，研究代表者；高安克己　研究分担者；國井秀伸）
基盤研究（B）2　汽水域における水生絶滅危惧植物の保全と修復（継続，研究代表者；國井秀伸　研究分担者；高安克己）
基盤研究（A）（1）　長良川河口堰が汽水域生息場の特性に与えた影響に関する研究（新規，研究分担者；國井秀伸　研究代表者；東京大学大学院工学研究科　玉井信行）
基盤研究（C）2　先史社会におけるサヌカイト利用の体系的研究（新規，研究代表者；竹廣文明）

公共団体，民間企業等との共同研究，受託研究など

（共同研究）
ヤマトシジミの高密度蓄養技術の開発　（高安克己＋株式会社海洋生物栽培センター）
（受託研究）
中海・宍道湖における水生植物の保全と修復に関する調査研究（国井秀伸，委託者；国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所）

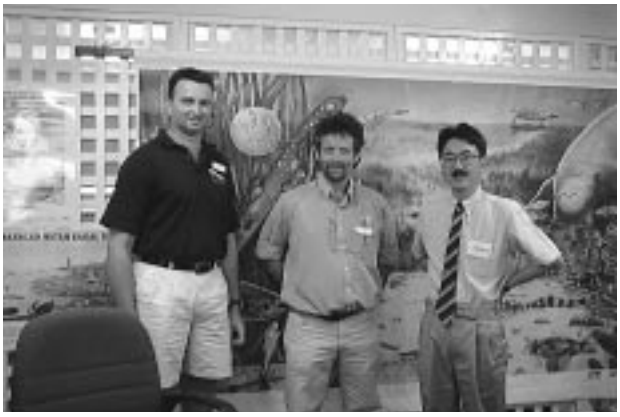

写真 3　クイーズランド州第一次産業局水産研究所にて

写真 4　サウスカロライナ大学ベル・バルーク海洋研究所フィールド・ラボにて．

「LAGUNA（汽水域研究）」誌に関するアンケート結果

汽水域研究センターでは平成13年10月に新センター移行後の「LAGUNA（汽水域研究）」誌のあり方に関するアンケートを客員研究員の方々のご協力を得て行いました．本誌は平成6年3月の創刊号以来，従来の紀要の枠を越える汽水域研究の総合学術研究誌をめざして発刊して参りました．しかし，実際には制度上の問題などからなかなか紀要の枠を乗り越えられず，位置づけが曖昧なまま経費と労力の問題までも抱え込むことになってしまい，先の外部評価では刊行の基本的位置づけについての見直しを強く指摘されたところです．今回行ったアンケートでは26名の方から回答をいただきましたが，その結果を以下にご報告します．センターでは新センター発足に向けての機構改革の一環として，これをもとに，今後引き続き「LAGUNA（汽水域研究）」誌のあり方について検討を重ねていくことにしております．

アンケートは下記の設問でおこないましたが，それぞれ次のような回答がありました．

質問1　「新」汽水域研究センターになった後，「LAGUNA（汽水域研究）」誌の発行について

A．今までと同様に汽水域研究センターの紀要として発行する．

B．汽水域研究センター以外が発行を継続する．

C．廃刊あるいは休刊にする．

＊Aと回答された方は質問2および3に，Bと回答された方は質問4に回答してください．また，Cと回答された方は，その理由を簡単に書いてください．

（結果）　A. 18名，　B. 8名，　C. 0名

このように，いずれかの方法にせよ「LAGUNA（汽水域研究）」の刊行を継続するというご意見でした．

そして，A.，B.それぞれの場合の発行方法については，A.の方には質問2，3，B.の方には質問4でご意見をうかがいました．

質問1でA.の場合

質問2　汽水域研究センターが発行を継続する場合について

A．編集方針や本誌の性格は今まで通りでよい．

B．調査報告やセンターの活動報告を中心とした紀要に変える．

C．学術論文を中心に，今まで以上に質の向上を図る．

（結果）　A. 11名，　B. 2名，　C. 5名

質問3　汽水域研究センターが発行を継続する場合の電子メディア化について

A．ほぼ完全に電子メディアに移行する．

B．従来のように冊子体を中心にした発行を継続する．

C．その他

＊Cと回答された方はその内容をお書きください．

（結果）　A. 2名，　B. 14名，　C. 2名

C.その他と回答された方のご意見

・電子メディアと冊子の両方が望ましい

また，A.と回答された方の中には，「CD-ROMおよびウェブ公開」という意見がありました．

質問1でB．の場合

質問4　汽水域研究センター以外が発行する場合について

A．センターの客員研究員や共同研究員などが中心となり研究会をつくり，会員の会費でその機関誌として発行する．

B．出版社などに発行を委託し，編集のみを汽水域研究センターにおく編集委員会が行う．

C．その他

＊Cと回答された方はその他の案をお書きください．

（結果）　A. 4名，　B. 3名，　C. 1名

C.その他と回答された方のご意見

・大学の相互間で新しい雑誌を発行する組織を結成し，季刊誌などを出す．

また，以上の質問項目に関連し，いくつかのご意見などを下記のようにいただきました．

・継続するとこに意味がある．正当な評価が得られるよう期待します．

・IT化の流れとはなっているが，印刷物として残すのはやはり重要．最近，アメリカの地質学会では，日本の古い地質学の雑誌に関心が高まってい

る．そうした面でも,印刷物として残すのは大切．
・汽水域研究センター以外が発行を継続する場合でも，センターの機関誌は継続して欲しい．それは，調査報告やセンターの活動報告を中心としたニュースレターとしても良いかも．
・汽水域関係の国内雑誌では唯一でありぜひ継続して欲しい.また印刷物として残すのが重要である．私たちもそうした中にある過去のデータを探し出して，今が論じられていることを考慮すべきである．
・調査報告や活動報告を中心とした形で継続しては．長期的な調査は，大学のようなところでしかできないと思う．そのデータや調査報告を記録として残すのは重要．本当の価値は，何十年後に評価されるのでは．
・研究会をつくり機関誌を発行するとの関連で，汽水域に関しては霞ヶ浦関係の方も多くおられるので，そうした組織や研究会との協力も探ってみる等も選択の一つでは．
・部外者が投稿しやすくしておくことも重要．
・自分の所属機関でも，紀要の存続は，評価が小さいという点，経費がかかるという点から，敬遠される傾向がある．出版社委託は，よほどのことがないと，結局出版社の経費までも負担することになり，かえって負担増になるかも．
・自分は文系だか，文系の論文が少ないので投稿しにくい面がある．
・コンサルタント会社や新聞社などから入手希望が結構あり，頒布して出版費用にあてても良いのでは．

編集後記

平成 4 年 4 月に 10 年の時限付きで発足した汽水域研究センターは今年度で一応の区切りをつけます．本号は「旧」汽水域研究センターでは最後の発行になります．平成 6 年 3 月の創刊号以来本号まで，原著論文 115 編，短報･資料・技術ノートなど 20 編が掲載され，汽水域研究の発展に寄与してきたことは関連研究者の広く認めるところです．平成 14 年度 4 月からは汽水域研究センターは新センターとして再出発します．今後の LAGUNA 誌の発行形態と位置づけについては本誌のアンケート結果記事にもありますように様々な議論があります．結論までにはもう少し時間がかかりますが，ひとまずこれまでの刊行に際しまして様々な場面でご協力と叱咤激励をいただきましたことに深く感謝いたします．